

分類にいささか不自然に思われる分類もあるだろうと認めているところである*2。

翻訳を進めながら訳語が変わるようでは、との批判は当然あるだろうが、ゆっくり続けている読書会の中間成果報告としてどうかご寛恕願いたい。

今回の翻訳は、班員諸事多亡につき、甲斐が下訳を作成し、班員からの修正を得た。引用文では既に翻訳があるものは極力それを使わせて頂いた。訳文上での引用の都合上引用時に語句を変えたところが数カ所あるが必要な所以外注釈には記さなかった。了解を請う。

訳語や訳文の不十分な点、また注釈の不足など各問題点にご指正をお願いします。

陳望道『修辞学発凡』第六篇 積極修辭

二・乙類 意境上の修辭

一 比擬

人を物に擬したり（つまり事物で人に喩える）物を人に擬す（つまり人で事物に喩える）ことは共に比擬である。『詩人玉屑』*3巻九には宋の楊万里の比擬に関する論をのせ以下のように述べる。

白楽天の「女道士」詩に「姑射の神山の峰に半ば残る白雪のように汚れなく、崑崙の瑤池に咲く一枝の蓮のように清らかである」とある。ここでは、花を美しい女性に比すのである。蘇東坡の「海棠」詩では「赤い唇が酒にふれてポーとした顔のよう、碧の袖に薄ぎぬをまとい肌がちらちら見えるよう」とある、これは美しい女性でもって花に比しているのである。

比擬とはみなこのようなもので、二種類に分けられる。一つは引用文の前者の例のように、人を物に擬したもので、擬物と呼ぶ。もう一つは後者の例で、物を人に擬すもので、擬人と呼ぶ。

(甲) 擬人

擬人はよく使われる修辭法である。描写や抒情の文章の中で、ほとんどどこにでも見ることができる。特に多

いのが童話である。童話の多くは擬人の修辭法ばかりで全編できあがっているのだが、長すぎるので、引用には向いていない。ここでは比較的簡単な例を以下に挙げよう*4。

(一) とても愉快的な春でした。朝からもう、ウグイスやホトトギスという音楽が得意な先生方が独唱し、ミツバチのお嬢さん達やアシナガバチの娘さんたちが合唱して、蝶々のお姐さんがダンスをしていました。夜になると、詩人の蛙のお兄さんたちが詩会を開き、演説会を開いて、夜が更けるまで賑やかでした。この集まりには、フナもやってきて、かわいらしい口ぶりで、「あの国」の話をしたのでした。

(魯迅訳『エロシェンコ童話集』・「魚の悲哀」)

(二) 空には満天の星が 人間界を見下ろしほほえむ 公社のなかに発電所が作られてからは 星は家々の中にやってくる。(『上海大躍進歌謡』・「星星落戸到人間」)

(三) うららかな春の季節は、かすみ立つ美しい景色で私に呼びかけ、大いなる大地は、すぐれた文章を書くべき資質を私に与えてくれている。(李白「春夜宴従弟桃花園序」)*5

(四) 飢えに駆り立てられて家を出て来たものの、一体どこへ行こうとしたのだろう。(陶潜「乞食」詩)*6

(五) かいこは死ぬまで糸を吐き続け、蠟燭は灰となるまで涙を流し続けます。(李商隱「無題」詩)*7

(六) 羌人の笛よ、なにもそんなに物悲しい別れの曲を吹き立てることはないではないか。ここ玉門関の外には陽光さえ関を渡って来ないのだ(王之涣「出塞」詩)*8

(七) 太陽がその光を消す頃、黄昏が大地より立ち上がって来る。この黄昏—大きな夜の軍隊は、幾千の目に見えない部隊と幾百万の戦士を持っている。この強大な軍隊は、記憶にない時代より、世界に反抗し、毎朝敗走するが、毎晩攻め込んでくる。日の入りから日の出まで彼こそが王様だが、日中は、打ち負かされて、隠れ家でじっと待っているのだ。

(『現代小説訳叢』「影」)

(八) 菜の花が黄色の衣を羽織り 緑の野原に覇を唱えようとすれば 豆の花も負けてはおらず やは

*2 『修辞学発凡』第五篇積極修辭一・二辞格 参照

*3 『詩人玉屑』：魏慶之の撰。魏慶之は南宋末の江湖派の詩人、『詩人玉屑』は当時の詩話を集めたもの。『四庫全書総目提要』では、詩論の参考書として推薦されている。引用文は「誠齋論比擬」の項で、「女道士」の詩は「玉真張觀主下女冠阿容」(白氏文集卷19)、『海棠』は「寓居定惠院之東雜華滿山有海棠一株土人不知貴也」(蘇東坡全集卷11)が本来の題名。なお、白居易詩の訳は明治書院『白氏文集』四による。

*4 以下、引用文の傍点は原著による。

*5 訳は岩波文庫『李白詩選』による。

*6 訳は岩波文庫『陶淵明全集』による。

*7 訳は岩波文庫『中国名詩選』下による。

*8 訳は岩波文庫『中国名詩選』中による。

り勢力ははっきりと分かれたまま。(劉大白『旧夢』「泪痕」三十六)

(乙) 擬物

擬物も描写や抒情の文章の中に多く見られるが、擬人ほどには使われない、用いても部分的である。いま以下に数例を挙げる。

(一) 鴻鵠が高く飛べば、一飛びで千里を経るもの。翼は既にできあがっており 四海を飛び越えるほど。四海を飛び越えられれば もはや手の出しようはない。憎で射ようとしても 何の役にも立ちはない(「鴻鵠歌」、この話は『漢書』「張良伝」に以下のようにある。高帝は太子を廃して、戚夫人の子趙王如意を立てようとした。結局果たせない。戚夫人は涙を流して泣いた。帝は言う、「楚の舞を舞っておくれ、私は楚の歌を唱おう」、そこで歌ったのがこの歌である。歌詞は太子を鴻鵠に擬し、彼が四皓の助けを得て、翼が既にできあがり、もはや廃することができない事をいう。)

(二) 雄のウサギはよくはねる、雌のウサギは目がちらついて、物がはっきりみえないという。しかし、二匹のウサギが並んで走っているとき、どちらが雄か雌か、なかなか判別できるものではない。

(「木蘭詩」結句、木蘭が自分を擬すもの)^{*9}

(三) 化粧を濃く施せば、愛らしい露を帯びた椿の花。化粧を淡く施せば、震えるような雨を経た梨の花。(喬孟符『揚州夢』第三節)

(四) 桃のかんばせ深紅に染まり、ユスラウメの如き唇は青紫色となって、ほっそりとしたなよ竹の白い指を絶え間もなくこすりあわせる。(『董西廂』)^{*10}

(五) 湘雲はゆっくり秋波を送り、そしてまたさしうつむいて自分の様子を見やり、はじめて自分がここに酔いつぶれていたことに気づいた。(『紅樓夢』第六十二回)^{*11}

以上二つの修辞法は、共に情感で胸が一杯になり、自己が対象と一体となった時にできあがるものだ。用い方の多い少ないはあるけれども、その内実は上下をつけることはできない。言葉について論じた中国国内外の書籍では、擬人ばかりを収録して、擬物について触れないものが多いが、そこには個人的な趣味という以外に確かな理由があるわけではない。また両者がなぞらえる分量にも各種の違いがあり、決して長さの決まりがあるわけではない。例えば、擬物で、「ゆっくり秋波をおくる」の

ように、ただ眼光だけを使って物に擬すものから、「鴻鵠歌」のように全て擬物を使うに到るまで、あらゆる可能性がある。その中間には無数の段階に分けられるのだ。擬人もまたしかりである。

二 諷諭

諷諭とは物語を作ってそこに風刺や指導の意味を託す修辞法である。その意図をはっきり述べ難いか或いは明確にも具体的にも述べ難いときに用いるのが一般的だ。とはいえ、物語にしてみると、しばしばその意図を述べてはいても、その物語は対象となる事柄の様子を描くばかりになる。加えて物語もしばしば簡略に作られ、自立するほどの内容までには到らず、時にはその描き方も不十分で、説明を加えないと託された意図がどこにあるのか簡単には分からない場合もある。それは緊迫した心情の中にあり、構想に十分な時間がないことが大半の原因だ。

心情の緊迫さの程度と物語の自立性の程度によって、諷諭は二種類に分類できる。一つは状況が緊迫していて、物語が急いで作られ、十分に自立したものになっていないもの。日頃我々は、これを概ね「喩え(比方)」と称している。以下に有名な幾つかの喩え話を挙げよう。例えば「株を守って兔を待つ(守株待兔)」、「矛盾(自相矛盾)」、「虎の威を借る狐(狐假虎威)」、「鵝蚌の争い(鵝蚌相争)」等が話の中で良く出てくる決まり文句となっている。この種類の喩えはその物語がその話自体で自立したものにはなっていないので、しばしば背景の説明とその意図を説明する文章とを一緒に読まねば、一体そこで何を言いたいのかははっきりしない。以下に挙げる「鵝鵝と鳴」、「土偶と桃梗」の二例などは、まさしくこの例にふさわしい。従って、例を挙げるには、その話自体とそれを説明する文面を一緒に記しておかねばならない。ここでは諷諭自身の文と、説明文を改行してならべ、喩えが用いられるときの実際の状況がはっきりと分かるようにしたい。

(一) 今もし夏后氏の世に、巢を組み、木と木をすり合わせて火をおこす人があったとすれば、必ず鯀・禹に笑われるであろう。殷周の世に、川の堤を切る人があったとすれば、必ず湯王・武王に笑われるであろう。して見れば当今の世に、堯・舜・湯・武・禹の道を襲めたたえる人があるとすれば、必ず新しい聖人に笑われるであろう。されば聖人は必ずしも古に循おうとはせず、一定不変の道に法ろうと

^{*9} 訳は岩波文庫『中国名詩選』中による。

^{*10} 訳は『「董解元西廂記諸宮調」研究』(汲古書院・H.10)による。

^{*11} 訳は岩波文庫『紅樓夢』(七)に基づく。

はしない。当世のことを論じて、その備えをする。

(以下諷諭)

宋の人が田を耕していた。田の中に切り株がある。そこへ走って来た兔が、切り株にぶつかり、頸を折って死んだ。その人はそこで鋤を捨てて、じつと切り株の番をして、また兔がぶつかるのを待っていた。しかし兔はもう手に入らず、その人は国じゅうの笑いものになった。(以上諷諭)

今、先王の政をもって、当世の民を治めようとするのは、すべて切り株の番をする類いである。(『韓非子』五蠹)^{*12}

(二) して見れば、孔子が堯を聖人とよぶのは何故か。明察な聖人が上位にあれば、天下に悪事がないようにさせる筈。いま堯という聖人の感化で農夫も漁師も争わず、陶工の作る器が粗悪でなかったとすれば、舜はその上なんで徳でもって感化する必要がある。舜が悪いところを改めようとしたからには、堯に過ちがあったのだ。舜を賢人とすれば、堯が明察ということは成り立たず、堯を聖人とすれば、舜が徳で感化したと言うことは成り立たぬ。堯の明察と舜の徳化と両方同時に成り立つことは叶わない。(以下諷諭)

楚の人で楯と矛を売るものがあった。楯を自慢して言うには、手前のもっております楯の丈夫なこと、どんな物でも突き抜くことは成りませぬ、と。一方、矛を自慢して言うには、手前の矛の鋭いこと、どんな物でも突き抜きます、と。ある人が言う、お前の矛でお前の楯を突いたらどうなる。売り手は答えることができなかつた。そもそも突き抜くことのできない楯と、何でも突き抜く矛とは、同時には有り得ない。(以上諷諭)

今、堯と舜と並べて褒めることができないのは、ちょうど矛と楯の話と同様である。(『韓非子』難一)

(三) 楚の宣王が群臣に問うた。「北方では、昭奚恤を恐れている、ということだが、実のところははたしてどうか。」群臣には、こたえる者はなかつた。すると江一がこたえて言うには、(以下諷諭)

「虎は、あらゆる獣を求めて食らいますが、狐を捕らえました。狐が申しますには、‘きみは私を食ってはならぬ。天帝は、私をすべての獣の長になさった。いまきみがわたしを食えば、天帝のおいつけに逆らうことになる。うそだと思ふなら、きみの先に立って歩いてみよう。わたしの後からついてきて、わたしを見て逃げだそうとせぬ獣がいるかどうか、見てみるがいい’と。虎は、いかにも、と思

ましたので、いっしょにでかけました。獣は、これを見かけると、みんな逃げ出しました。虎は、獣が自分を恐れて逃げるのだ、とは気がつかず、狐を恐れているものと思ったこととございます。」(以上諷諭)

王さまの地は方五千里、軍兵は百万、これを専ら昭奚恤にゆだねられております。ですから北の方が奚恤を恐れますのは、実は、王さまの軍勢を恐れていることとございまして、それは、ちょうど、獣たちがみな虎を恐れたようなものとございます。(『戦国策』楚策一)^{*13}

(四) 趙が燕を伐とうとしていた。そこで、蘇代が、燕のために趙の恵文王にいうには、「このたび、こちらに参りながら、易水をわたりましたところ、(以下諷諭)

蚌が、肉を出して陽にさらしておりました。しかるに鵝がその肉をついばみましましたので、蚌は貝を合わせて、その嘴をはさみました。鵝が「今日も雨がふらず、明日も雨がふらなければ、すぐさま、死んだ蚌ができあがるぞ」と申しますと、蚌のほうでも鵝に、「今日出してやらす、明日も出してやらなければ、すぐさま、死んだ鵝ができあがるぞ」と申し、どちらもゆずろうといたしません。そこで、漁師が、まんまと両方ともとらえてしまったこととございます。(以上諷諭)

いま、趙は、燕を伐とうとしておられますが、燕と趙とが永らく張り合つて、民を疲弊れさせてしまいでると、臣には、強秦が漁父になりはすまいか、と危ぶまれるのでございます。されば、なにとぞ、王さまにはよくよくおはかり下さりますよう。」恵王は、「なるほど」というと、取りやめにしたのでした。(『戦国策』燕策二)。

(五) 恵子が梁の大臣であったとき、荘子は恵子に会いにいった。ある人が恵子にいった。「荘子か来たのは、あなたに代わって大臣になろうとしているのだ。」そこで恵子は恐れて、三日三晩も国中を捜した。荘子は恵子のところへ行つた。「南方に鳥がいて、名を鶇鶇というが、君は知っているかな。その鶇鶇が南海から発つて北海へ飛ぶときは、梧桐の木でないと止まらないし、竹の実でないと食わないし、醴泉でないと飲まない。その時、鶇が腐った鼠をつかまえた。ちょうどそこを鶇鶇が通りかかった。鶇はあおむいて鶇鶇を見、クワツと言っておどした。(以上諷諭)

いま君は君の梁国のことでわたしをクワツとおどそうというのかな。」(『荘子』秋水)^{*14}

^{*12} 訳は筑摩叢書151『韓非子』による。以下同じ。

^{*13} 訳は平凡社古典文学大系7『戦国策／論語／論衡』による。以下同じ。

^{*14} 訳は平凡社中国古典文学大系4『老子／荘子／列子／孫子／呉子』による。以下同じ。

(六) 孟嘗君が秦に行こうとした。止めるものがおびたしい数に上ったが、聴かなかった。蘇秦が思いとどませようとすると、孟嘗君は言った、「人間界のことなら、わたしはもう知り尽くしている。まだ聞いていないのは、幽冥界のことくらいなものだ。」蘇秦がいうには、「臣がまいりましたのは、もちろん人間界のことを申しあげようとしてではございません、幽冥界のことでお眼にかかろうとしてでございます。」そこで孟嘗君が会うと、孟嘗君にいうよう、「このたび、来がけに、淄水のほとりを通りがかりましたところ、(以下諷諭)

泥人形と桃の木の木偶とが話し合っております。桃の木の木偶が泥人形に‘君は西岸の土だ。きみをこねて人の形にこしらえたのだから、八月の候ともなつて、雨がふり、淄水があふれてくれば、お前はそれまでさね’と申しますと、泥人形は申しました。‘そりゃ違う。わたしは西岸の土だ。土だから、西岸に帰るだけのことさ。ところで、きみは東国の桃の木の木偶だ。きみを削ったり彫ったりして人の形にこしらえたのだから、雨が降り、淄水があふれてきて、きみを流しちまえば、漂い流れて行くきみは、いったいどうするんだね’と。(以上諷諭)

いま、秦は、四方要害の国でございまして、たとえてもうせば、虎口のようなもの。君がお入りになれば、はて、出ておいでになりますことやら。」そこで、孟嘗君は取りやめることにしたのだった。(『戦国策』齊策三)

もう一つの類は、状況がかなり落ち着いていて、物語もその分整えられており、物語としての自立性がかなり高いものだ。我々は日頃これを概ね「寓話」と称している。寓話にはパニアン^{*15}の『天路歷程』のように長いものもあるが、ここでは短めの例を幾つか挙げよう。

(七) 太形山・王屋山の二つの山は、広さは七百里四方、高さは一万仞もあるが、もともとは冀州の南部、河陽の北部にあった。北山愚公という老人がいて、よわいはもう九十歳に近かったが、この太形・王屋の山を真向かいにして住んでいた。かれは山の北がわが険しく塞がっていて、出入りのたびに遠まわりしなければならぬのを苦にやみ、家族をあつめてこう相談した。「わたしはお前たちと全力をつくして山の険しいところを平坦にし、豫州の南部にむかって道路を通じ、漢水の南岸に到達させたいと思うが、どうであろう。」家族の者たちは口々にみな賛成した。ところが愚公の妻だけが異議を申し立てていった。「あなたの力では、ちっちゃな丘をくずすことさえとてもできません。ましてや太形・王

屋のような大山をどうするといひのですか。それにいったい、くずした土や石はどこに運ぶのです。」みんなはこたえた。「それは渤海の隅っこか隠土地方の北部にでも捨てましょう。」かくて愚公は息子たちや孫たちを引き連れ担いで運ぶものは三人、岩石を打ちくだき、土地を切り開いて、土や石は箕や畚で渤海の隅っこに運んだ。愚公の隣家の京城氏の寡婦に忘れ形見の男の子がいて、やっとなの抜けかわる年頃であったが、いさんで出かけて愚公の仕事を手伝い、寒暑の季節の変わり目にやっとなたび家に帰るといふ有様であった。河曲の地に住む智叟(利口者の老人)は愚公の話聞いて笑いだし、その仕事を止めさせようとしてこういった。「話にもならぬよ、君の馬鹿さ加減は。老いぼれのわずかな力では、山の草一本だつてろくにむしれはしない。ましてや土や石をいったいどうしようといひのだ。」北山愚公は、ふうつとため息をついていった。「君は固定観念にとらわれていて、そのかたくなさは手のつけようがなく、あの寡婦の幼児の頭にも全く及ばない。ぼくが死んでも子供は生き残り、その子供はさらに孫を生み、その孫はさらにまた子供をうむ。その子供にはさらに子供ができ、その子供にはさらにまた孫ができ、子から子へ孫から孫へと伝えて、尽きはてることもない。それに対して山のほうはますます高くなるということはないのだ。して見れば、なにも平坦にできないなどと気にやむこともなからうよ。」河曲の智叟は返す言葉もなかった。太形・王屋の蛇を手に持つ山の神は、この話を聞いて愚公の仕事が中止されそうもないのを恐れ、このことを天帝に報告した。すると天帝は愚公の真心にごかされ、夸娥氏の二人の息子に言いつけて太形・王屋の二つの山を背負わせ、一つを朔北の東部に、一つを雍州の南部に移した。それからというもの、冀州の南部から漢水の南がわにかけて険しい丘陵はなくなったのである。(『列子』湯問)

(八) むかし、富裕で愚かな人がいた。彼は全くの無知であった。他の裕福な人の家に行ったとき、そこで三重の楼閣を見たのだが、それは広壯で、壮麗、ゆったりとし、すっきりとしていたので、自分もほしくなり、「わしの財産は彼にひけを取りはしない。なのに、どうして今までこのような楼閣を造っておかなかったのだろうか」と思った。すぐさま大工を喚んで、「あのように美しい建物を造れるか」と尋ねると、大工は、「あれは、あつしが建てたものでさあ。」「それでは、彼のとそっくりの楼閣をたててくれぬか。」そこで大工は土地を測量し、煉瓦を積み、楼閣を建てはじめた。愚か者は、煉瓦が積

*15 班蘭『天路歷程』：17世紀イギリスの作家ジョン・パニアン作。

まれ、その上に屋舎が建てられるのを見ても、どうにも不審な思いがして納得できなかったので、大工に尋ねた、「何を作ろうとしているのかね。」大工は「三層の建物をつくるんでさあ。」「わしは、下の二層はいらないのだ。一番上の階を先に作ってもらいたいのだ。」大工は答えた、「それは無茶というものです。一番下の建物を建てないで第二層を作れやしませんよ。第二層を建てないで、どうして第三層を作れるもんですか。」愚人は頑として聞き入れなかった。「わしは、下の二層は必要ないのだ。どうあっても一番上のだけを作ってくれ。」人々はこれを聞いて、みな失笑して言った、「下の一層を作らないうちに、上を作れるわけがない」と。(『百喻経』三重楼喩)^{*16}

以上の二つの例では、一つは智恵あるものが困難をおそれることより、愚か者でも努力することのほうが優れることを寓し、もう一つは順序に従って努力するべきもので、物事は下から積み上げて行くべきだという主張を寓している。共に物語り自身が明快で良くできているので、これ以上の説明は不要である。

諷諭の物語は、多くが状況に応じて作られるものなので、物語の中の人物も多くが臨機応変に作成される。例えば、易水を渡った事があれば、鷗と蚌の有様を述べ、幽冥界の話を書き得ないときは土偶と桃木がどうだったかの話になるのだ。作成するときにも多くは部類についてあれこれ考えない。人(例えば富裕で豊かな人)に託すこともあれば、人以外の生物(例えば虎や狐)、或いは無生物(例えば土偶)に託すこともある。もし、人以外の生物や無生物に託す場合、その物語は同時に二つの譬喩成分を持つはずだ。つまり、擬人の手法を用いて擬物のねらいを託すことになるはずである。例えば「虎の威を借る狐」の場合、表面は狐と虎が人のように話し行動するので、擬人である。けれども内実は狐と虎によって人を喩えているので、擬物となる。その他でもこの種類に入る例はやはり同様である。

三 示現

示現とは、実際には見えもせず聞こえもしない事物を、いかにも見えたり聞こえたりしたかのように述べる辞格である。見えもせず聞こえもせずというのは、そのもの自体が既に過去のものとなっていたり、まだ先のことであったり、あるいは論者の想像の中の姿にすぎないからだ。しかし、論者にはそのイメージが極めて強いので、

実際との隔たりを考えもせず、或いは考えてもその制約を嫌って、実際には経験してはいないことでも、まるで自分で体験したかのように述べてしまう。その結果話の中には時空を越え実在を超越する示現という特別の辞格が現れることになる。

示現は大別して、追憶、予言、空想の三種類となる。追憶の示現とは過去の出来事をあたかも目の前に有るかのごとく述べるものだ。

(一) 戦国の六王を滅ぼし、天下を統一するや、蜀の山林を禿げ山にして、その木材で阿房宮が姿を現した。揺れる波に長く掛け渡された橋は、雲もないのに何かの龍が横たわるよう。空中の楼閣を繋ぐ通路は、雨も降らないのに架かる虹のよう。その高さは量れず、東西の長さもわからない。歌の舞台から響く歌声は暖かみを帯びて、穏やかな春の光のよう。……星の輝きのように見えるのは、宮女が開く鏡の光である。緑の雲が揺れるように見えるのは、彼女たちが朝の髪を梳く姿である。渭水に油が覆うのは、彼女たちの洗顔水が流れ込むからだ。鶯があちこちに立ちこめるのは、彼女たちが香草をたくからである。……楚人の項羽が火をつけるや、残念ながら焦土に帰した。(杜牧「阿房宮賦」)

予言の示現とは追憶の示現と逆に、未来の事情が既に目の前に並べられているかのように話すものだ。

(二) たとおいらいらを通してくれんでも、安心めされ。遠きものは大股でちかづき鉄棒でなぎ倒し、近いものは猿臂のべし守り刀でぼっさりやる。ちびつこ野郎はひらさげてつまさきで蹴り上げる。でっかい奴はたぐり寄せ、そっ首ぼっさり切り落とす。ぐっとにらめばゴゴゴッと大海原も涌きかえり、ビュユッとふればガラランと山なすいわおも崩れおち、脚で踏まえればべりべりと大地の軸もうち揺らぎ、手ぐりよせればガタガタと天の関も揺れ動く。(『西廂記』寺警二本喫)^{*17}

空想の示現となると、想像される事情を本当に目の前に有るかのごとく述べ、時間の過去や未来とは全く関係はない。

(三) 今夜、鄜州の月のかけ、ひとりや、閨にながむらん。都恋しとおさなごのしらぬあわれもはるけきに霧の香しめる。黒髪よひかりぞさゆる玉の肌、いつかとばりによりそいてかわく涙をてらさせてまし。(杜甫「月夜」詩。(このとき杜甫は長安におり、自宅は鄜州にあった。ここで「ひとりや閨にながむらん」等と言うのは、想像に過ぎない)^{*18}

(四) ……四つの虬に曳かせて驚にのり、たちまち風を

^{*16} 訳は平凡社中国古典文学大系60『仏教文学集』による。

^{*17} 訳は平凡社中国古典文学体系52『戯曲集上』による。以下同じ。

^{*18} 訳は『新訳杜甫詩選』(春秋社)による。

迎えて空にのぼった 朝蒼梧の野を立ちいでて 夕べ崑崙山頂の峴圃に至る しばらく天門に休もうとすれば 日は見る見るうちに暮れかかる 日の御者羲和に歩をゆるませ 日の沈む崦嵫の山に近づかせず はるばるとおく長い路を のぼりくだってわがよきひとを捜し求めよう 咸池で馬に水を飲ませ 手綱を扶桑の木にむすび 若木を折って日を払い かくてしばらく逍遙する 月の御者望舒を先駆に立て 風の神飛簾にあと追わせ 鸞鳳は私のために先触れするが 雷神はまだまだ供ぞろえが足らぬという そこで鳳鳥を高く飛ばせ 夜に日をついで急がせれば 飄風はどっと集まりまた散って 雲霓をつれて出迎えた。（屈原「離騷」）^{*19}

これらの他に以下の幾つかの例もこの部類に属す。

（五）李天王は……兵を進めて戦いをいどめば、悟空また少しもひるまず、……洞穴の外に並んで軍陣をはる。みよ、この敵味方入り交じった戦いを、そのすさまじいありさまは以下のよう。

寒風はビュウビュウ吹き、怪しげな霧が立ちこめ、あちら側では旗や幟がはためき、こちら側では武器がきらめく。涌きあがる兜は光り、波なす甲冑は輝く。涌きあがる兜が光り太陽に映える様は、まるで天を撞く銀の磬、重なる甲冑が岩崖に積み上がる様は、まるで大地を押さえつける氷の山のように。（『西遊記』第五回）

（六）谷川にそって山を登り、源流のところによつてくると、そこは滝がかかっていた。猿どもは手を叩いて褒めあげ、「凄い、凄い、誰かできる奴はいないか、潜って源を探り出し、怪我をしなかつた者がいたら、そいつを王様とあがめることにしよう。」そう叫ぶ声が三度響くと、群れの中から一匹の石ぎるが跳びだし、声を上げて、「俺が入る、俺が入る」と叫んだ。みごとな猿だ。みよ、彼は目を閉じて身をかがめて、ぴよんと跳ねると、真っ直ぐ滝の中に跳び込んでいったではないか。（『西遊記』第一回）
更に断定の形式で推定を示すものも、この部類に属す。

（七）今大王様は……忠臣の進言を捨て、敵の願いに従っています。臣めは越が呉を破り、姑胥の台閣に野獣がうろつき、宮殿には雑草が生い茂るのを必ずや見ることになるでしょう。（『呉越春秋』九 子胥の語）

（八）ひそかにあの織女の身分と牽牛の運命をおもえば、老いることはなく、何時までも生きている事はできるけれども、彼らは銀河に隔てられて音信もなく、何時までも孤独である。天宮に尋ねてみよ、

彼らは必ずや相思の病を患っているに違いない。
（白朴『梧桐雨』雑劇第一節）^{*20}

以上の三種の方法は必ずしも単独で使うものとは限らず、もし必要であれば、一緒に用いても良い、例えば魯迅は「現代中国の孔夫子」の中で以下のように述べている。

此等の絵から得た印象からくる孔子様の有様を言えば、此先生は頗る瘦せた年寄りで大きい袖をもつながい着物を着、兵児帯に剣を一本刺して居て或いは杖を小脇に挟んで居る。しかも始終笑わないで大変いかめしいものであった。若しそのそばに侍座すれば何時も背柱をピンとして居なければならぬから、二三時間たったら節々が痛んで普通の人間なら逃げ出したくてたまらないだろうと思う。

その後自分は山東に旅行したことがあった。道路の不平に苦しめられて居る内にふと我が孔子様の事を思いついた。その厳然たる道貌を持つ昔粗末な車に乗って跳ね上げられたり揺られたりしながら、このあたり忙しく駆け廻ったのかと思って、頗る滑稽に感じた^{*21}。

この話は追憶の示現だが、空想の示現でもあって、孔丘という没落奴隸主貴族の形象をいきいきと描きだしている。

四 呼告

話の中で、聞き手或いは読者から離れて、突然話の中の人物や物事に呼びかけるもの、これを呼告と呼ぶ。呼告も比擬や示現と同じように情感が激しく高まった時に生まれるもので、しばしば比擬あるいは示現のような性質を持つ。ここでは、それが持つ性質により比擬呼告と示現呼告の二種類に分けることにしよう。

甲 比擬呼告

（一）宝玉が釣竿を持って半日待ったけれども、ピクリとも動かない。やっと一尾の魚が岸の方であぶくを吐いたので、宝玉がさっと竿をそちらへ向けかえる。これまたびっくりして逃げてしまった。宝玉はやっきになって、「ぼくは特別気の短い人間なのに、奴さんたちときたら、あべこべに気が長い人だからな。こりゃ一体どうしたらいいってんだ。ねえおいお魚ちゃん、いい子だから、はやくこっちへいらっちゃい。ちょっとぼくの顔を立っておくれよ」といったので（探春・岫煙・李紋・李綺の）四人も

^{*19} 訳は『目加田誠著作集』第三卷（龍溪書舎）による。

^{*20} 白朴（1226～1312?）『梧桐雨』は、玄宗と楊貴妃の物語に基づく戯曲。

^{*21} 訳は学習研究社刊『魯迅全集』8（且介亭雜文二集）による。

どっと笑った。(『紅樓夢』第八十一回)

(二) 飛びさる日よ月よ、まあ一杯おやりなされ。
私には青空の高さも、大地の厚さもわからない。
寒々とした月と暖かい日が、人の寿命を追い立てるのを知るばかりだ。熊の手を食べる富貴な人も、蛙を食べる貧乏人もみなおなじ。神君はどこに、太一神はいずこにいらっしゃるのか。(李賀「苦昼短」)
(三) 大ねずみおおねずみ 我が黍を食むなかれ
三年が間仕えしに われをあわれむこともなし 今こそ汝れを去りゆきて 楽しき土地に移りなむ 楽土よ楽土ああそこに 生くべき場所もあるべきか。(『詩経』魏風「碩鼠」)^{*22}

(四) 東の空は明るくなり大きな星も見えなくなって、太白金星のみが残月に向かって光っている。ああ、残月よ疑うなかれ、光や輝きを共にするのめわずかな間のみ。残月が耀き、太白がきらめき、鶏が三度鳴く、夜の終わりの頃。(韓愈古詩「東方半明」)

乙 示現呼告

(五) 大仙はそれを聞くと、ケラケラと笑い、褒めあげていった、「孫行者殿は、実に立派な猿の王様だな。以前彼が天宮で大騒ぎを起こし、天から地から網をかけても、彼をつかまえられなかったと聞いたが、実にもっともだ。—お前さんが逃げだしたことはともかく、なんでまた柳の木などここに縛られて、身代わりになどしたのか。決してゆるさんぞ。逃がすものか。(『西遊記』第二十五回 お前、とは目の前にはいない孫悟空をさす。)

(六) 彼ら三人の戦いについてはまず置き、三蔵法師は洞窟の中で泣きながらも、弟子たちのことを心配していた。涙をながしながら、「猪八戒や、お前はどこかの村で良い方に出会い、お齋をむしゃむしゃ食べているのではないかしら。沙悟浄や、お前はどこかで八戒を捜しているのではないかな、会えれば好いが。わたしが妖魔に出会って、ここでひどい目に遭っていることは知るまい。お前たちに何時また会えることやら。」(『西遊記』第二十九回 お前、とは目の前にはいない猪八戒、沙悟浄をさす。)

(七) 客係が魯智深を連れて方丈につくと、荷物をほどいて、手紙を取り出し、手に取った。……清長老は届いた手紙を読み終えると、……両班の多くの役僧を呼び集めた。全て方丈にやってきたところで、こういった。「汝らここにいる僧侶よ、我々の同僚の智真禪師はなんとも分別がないことだ。ここに来た僧は、そもそも経略府の軍官である。人を殺してしまったため、髪を落として僧となっている。

二度も僧堂で事件を起こしたため、彼を置いておけなくなった。お前さんのところにおいておけないからといって、わたしのところに押しつけてくるとはな。彼をここで受け付けないというのは、智真どのがこれほどまでに頼まれるのだから、それは難しい。ここに置くとすると、もし規律を乱した場合どうすれば好いのか。」(お前さん、とは目の前にいない智真のこと)(『水滸伝』第五回)

五 誇張

話の中の客観的な事実よりも大げさで誇大な表現を、誇張と呼ぶ。話の中にこのような誇張が出てくるのは、概ねその時話者が主観的な情感の表出の方に力を入れ、客観的に事実を記述しようとしなかったからである。主観的な情感というものは、強い感動を受けると、一のこと十に思われ、客観的な事実に従うものではない。従って、美しい婦人を見ると、

(その絶妙な美しさは)背の高さがもう少し高くても高すぎ、もう少し低くても低すぎ、肌に白粉をつければ白すぎ、朱を施せば赤すぎるほど(宋玉「登徒子好色賦」)

という気持ちになり、武人については

力は山をつらぬき、気は世界を覆うばかりのありさま(項羽「垓下歌」)

と述べることになる。誇張というのはこのような強い感動から起こるものなのだ。

誇張の作用は、強い感動表現にあるので、感動を述べる小説や詩歌などの作品を鑑賞するとき、この表現法にであえば、その情感に思いを致して、その本来の姿に戻し、実際の状況に沿って理解して、現実を越えた描写に拘泥してはならない。孟子が言うように「『詩経』について語る者は、文字にとらわれて語句の意味を誤解してはならない。また語句にとらわれて詩人の述べようとした気持ちを曲解してもいけない。素直に推量して、詩人の述べようとした気持ちを受け入れる。それではじめて詩が語れるのである。もし語句にばかりとらわれると、「雲漢」の詩の「わずかに残れる周のくにたみも 生き残れるものついになし」という句など、言葉通りに信じるならば、周の人民は全滅したことになる(『万章』篇上)^{*23}」であり、かくあってこそ誇張の表現法の真意を本当に理解したものだと言えよう。杜甫の以下の詩の二句、

霜を帯び雨をとどめる四十圍の太さ 黒々と空にそびえる二千尺の高さ(「古柏行」)

などに対しては、沈括(存中)なら確かに「四十圍とい

^{*22} 訳は目加田誠著作集第二巻『詩経訳注(上)』による。

^{*23} 訳は平凡社古典文学大系3『孟子』による。

えば径は七尺である、細長過ぎはしないだろうか」と言うだろう（『夢溪筆談』二十三譏諍門）^{*24}。黄朝英ならば杜甫を弁護せねばならぬと、「沈括は頭もよく働き、九章算術も得意なのに、なぜここで間違っただろうか。古代の制度では三圍で一径である。四十圍であれば百二十尺となる。圍が百二十尺であれば径は四十尺となるではないか。七尺と言えるものか。もし両手の親指人差し指を合わせて一圍とすれば、一小尺となり、径は一丈三尺三寸となる、その場合でも七尺にはならないのだ。武侯廟の古い柏の木は、古代の制度で計ったものだ。従って径は四十尺で、その高さが二千尺というのはしかるべきであろう。どうして細長いと批判できようか」と言うに違いない（『苕溪漁隱叢話』前集卷八引『細素雜記』、今本『細素雜記』にこの部分無し）^{*25}。これは文字通りに理解するという間違いをおかしている。たとえ彼らの計算上の間違いを容認するとしても、彼らのはじく算盤の音が誇張表現の本当の響きを聞こえなくしてしまうようでは不満もでてこよう。

誇張表現は二種類に分けられる。（一）は一般的なもので、一般的誇張と呼べるもの。（二）は事象の前後に関わるだけのもので、先行誇張と呼べるもの。一般誇張表現の使用場面は色々あり、昔からこの点に注意したり論述したりするものは比較的多かった。例えば所謂「増語」および「増文」（漢の王充『論衡』卷七八「語增」「儒増」「芸増」等の篇）、所謂「誇飾」（梁の劉勰『文心雕龍』卷八誇飾篇）、所謂「激昂の言」（『苕溪漁隱叢話』前集卷八引く『詩眼』）、等は皆この種類の誇張表現である。これは実際にはかなり一般的なものである、一般的誇張表現と呼ぶことにする。先行誇張のほうは、実際にはその後起こる現象を始めに起こる現象の前（少なくとも始めに示される現象と同時に）に表現してしまおうとする、つまり落伍者が却って事態を先取りしているという特徴をよく持っており、従ってそれを先行誇張と呼ぶのである。

一 一般的誇張表現

（一）明日の朝はどうでも家に帰りとうございませぬ。泊めていただきましたのは二、三日のことで、それほど長逗留させてもろうたわけでもございませぬが、昔から今日が日まで見たことも、食うことも、聞いたこともないものを、何もかも経験させていただきました。（『紅樓夢』第四十二回）

（二）ちょうど嚴致和が客間で客の相手をしていた時、乳母が慌ててやって来て、「奥様が息を引きとられました」と知らせた。嚴致和が泣きながら病室に入っていくと、趙氏が余り泣きすぎて、寝台のへりにつんのめり、頭をぶつけて気を失っている。とりあえずみなで趙氏を助け起こし、齒をこじあけて湯をそそぎこんでやった。趙氏は息を吹き返すと、今度は髪をふり乱したまま床をころげまわり、天地も暗くなるほど泣きに泣くのである。嚴致和にも手の付けようがなかった。（『儒林外史』第五回）^{*26}

（三）錦江の春景色は大空にも大地にも押し寄せているというのに、玉壘山にかかる白雲は古今にわたって変動し続けている。（杜甫「登樓」）^{*27}

（四）ここ世界の東南にあたって呉楚の大地がまっ二つにひき坼かれてこの湖水となり、天も地も昼となく夜となくその水の上に浮動している^{*28}。（杜甫「登岳陽樓」詩、坼、読んで策の如し、裂の意味）

（五）わが白髪、三千丈もあろうか。つもる愁いのために、こんなにも伸びたのだ^{*29}（李白「秋浦歌」）

（六）風が吹くや連日吹き続け山も吹き倒し、白波は瓦官閣よりも高く上がる（李白「横江」詞六首之一。瓦官閣は瓦官寺にある。古碑にいう、昔、僧がおり……瓦棺でここに葬った。……寺の中に立派な建物があり、三十五丈の高さがあつたと。）

（七）黄河広しと誰かいう 舳を浮かべむほどもなし（『詩』衛風「河広」、舳、音は刀、小舟で刀の形に似たもの。）

（八）黄河の水は大空から流れくだり、激しく海に流れ入って、決して戻ることはない。（李白「將勸酒」詩）^{*30}

（九）呉の絹糸に蜀の桐 たけなわの秋の日に 弦の張られ終われば
大空を流るる雲は息を凝らし 顔れんとして動きを止めぬ
湘水の女神の現れて竹の葉に涙をそそぎ 素女もまた悲しみ嘆く
名にし負う李憑の今し花の都に 豎琴を弾ずなり
崑山の玉の砕くるか 鳳凰の鳴き叫ぶか 蓮の花の露に涙をこぼすか
はたまた蘭の花のほほえむか 豎琴は鳴り響く

^{*24}『夢溪筆談』は北宋の沈括の撰。杜甫の詩は沈括の引用。

^{*25}『苕溪漁隱叢話』は南宋胡仔の撰、『細素雜記』は南宋黄朝英の撰。

^{*26}『儒林外史』：訳文は平凡社中国古典文学大系43『儒林外史』による。以下同じ。

^{*27}訳は岩波文庫『杜甫詩選』による。

^{*28}訳は岩波文庫『杜甫詩選』による。

^{*29}訳は岩波文庫『李白詩選』による。

^{*30}訳は岩波文庫『李白詩選』による。

長安城十二門の前 冷ややかなる日の光の緩
びはじめ
二十三弦のひびきは天つ御神のこころも揺り
動かせり
天地の始めの日 女媧の女神の石を練りて天
を補いしところ
天もまた驚けば石は崩れて水を洩らし 秋雨
となつて煙りわたれり
夢のうちに神の雄山に入りゆきて神の姫に教
うれば
老いたる魚は波間に跳り 瘦せたる蛟は舞を
舞い出す
月ありて枝の木を樵るといふ呉剛のひとり寝
もやらず耳を澄ませば
露の足はな案目に飛びて寒々と月の兎の毛を
濡らしおり

(李賀「李凭箏篋引」詩)^{*31}

(十) いまやひろびろと限りなくはびこる洪水は、
方々で災害を起こしている。蕩蕩とすさまじく流れ
ては山々を包みこみ、高い岡にもはい上がっており、
見渡すかぎり天道を乱している。(『尚書』堯典)^{*32}

(十一) その前軍は戈を反対に向けかえて、その後
軍を攻めたてて逃げた。その混乱のはげしさは、流
血が杵をただよわせるほどであった。(『尚書』武成)
以上に挙げた例から見ると、例えば例一、例五、例七な
どは、数量上の誇張だといってよいかもしれない。例
二、例三、例四などは、性状上の誇張といってよいか
もしれない、結局は如何なる一面にも限られないので
ある。

二 先行誇張

(十二) 二人は席につき、最初はちびりちびりやっ
ていましたが、おいおい話もはずんできて、思わず
しらず杯のやりとりがしげくなりだしました。おり
しも隣近所の家から、簫や笛の音、三弦に合わせた
歌声がにぎやかに聞こえ始め、頭上にはまたまん
まるの明月がさえざえと輝り渡っています。二人は
ますます興が乗り、酒も注ぐかたはしから飲みほす
というふう(『紅樓夢』第一回)^{*33}

(十三) 茶がすむと、二卓に皿と箸が用意され、
……つづいて各テーブルに八、九碗の料理が並べら
れ、……声がかかると、いっせいに箸が上がるや、
風に吹きまかれる残雪さながら、もう大半が片付
けられてしまっていた。(『儒林外史』第二回)

(十四) 宝玉は言った、「この道はどこへ行くのだ

ね。」焙茗は言った、「これは北門へでる大通りでご
ざいます。門を出たら、なんの遊び場所もない淋
しいところがございますぜ。」宝玉はそれを聞いて
うなずいた。「いや、その淋しい場所がいいんだ」
といいながら、ピシリと鞭をあてるかあてないうち
に、馬はもうすでに曲がり角を二つほどまわって城
門を出ていた。(『紅樓夢』第四十三回)

(十五) 「どうぞ」の言の葉いださぬうちに とび
出すいらえが「うかがいます」早くもひめをねえ
さま呼ばわり たてつづけにはいはい承知(『西廂
記』請宴)

(十六) 武王が殷に勝って商の都につくや、まだ車
から降りるまえに黄帝の子孫を薊に封じ、帝堯の子
孫を祝に封じ、帝舜の子孫を陳に封じるほどだっ
た。(『礼記』楽記)

(十七) 愁いに腸は断ち切れるほどこれが酔わざる
におれようか。酒の未だ至らぬうちに、既に酔いに
涙を流すありさま。(范仲淹「御街行」)

上に挙げた幾つかの例から見ると、すべて後からに起
こる現象が、この修辞技法の中では先に起こる傾向を持
つ。その傾向が軽度の場合は例十二のようなもので、後
から起こるはずの現象「飲みほす」をその前の過程の現
象「酒を注ぐ」と同時に述べている。その傾向が強いの
のが例十三以下の各例で、後に起こる現象がそれに先行
する現象の前に述べられている。従って我々はそれを先
行誇張というのである。先行誇張は、専ら続けて起こる
二つの事象について、その「抜く手もみせぬ」素早い時
間を特別に形容しようとするとき用いられるのだ。

古来誇張表現を論じて周到なのは、私の知る限り、汪
中が第一である。彼は以下のように述べている。

『礼記』「雜記」に「晏平仲が祖先をまつとき、
豚の肩肉を豆に入れなかった」とある。豚肉は俎の
器にはちょうど入るが、豆の器では大きすぎたとい
うのだ。豆の径は一尺で、豚の両肩分を並べたほど
だから、そこに置けない大きさではない。ここでは
その儉約ぶりを言うのである。『楽記』には、武王
が商を破ったとき、まだ車から降りるまえに、黄
帝・堯・舜の子孫を封じるほどだった、とある。大
がかりな封事は廟で行われなければならない、祭りの
ために策命を出すのは、車上で行うものではない。
ここでは、これがまず行われなければならない仕事だ
というまでなのだ。『詩』に「嵩高維岳、峻きこと
天をきわめる」。これは、その高きことを述べるもの
だ。これが形容の言葉遣いというものである。……

^{*31} 訳は岩波文庫『李賀詩選』(黒川洋一編)による。

^{*32} 訳は平凡社古典文学大系1『書経 易』による。以下同じ。

^{*33} 訳は平凡社中国古典文学大系44『紅樓夢』(伊藤漱平訳)による。

言葉遣いその内容のままであれば目立たない、だから形容するのである。（『述学』積三九中^{*34} 汪中の所謂形容とは、ここでいう誇張にほかならない。）

短文とはいえ、二種類の誇張法のことを共に述べているのである。

付記：

従来、誇張表現を利用するときには多くの制限が指摘されるのが常だった。その中で最も参考になるのは二種ある。（一）主観の面では情感の自然な流露に基づくこと、例えば『古文苑』の中で宋玉の作とされる「大言賦」、「小言賦」などは、完全なでっち上げであり、何の意義もないといえよう。（二）客観の面では事実について間違った認識を導いてはならないということ、例えば「白髪三千丈」といっても、決して事実の認識を誤ることはない。もし「三千丈」といわず「三尺」といってしまうと、容易に誤解を招くことになるだろう。事実の認識を誤らせるようでは、修辞上の誇張ではなく、ただの虚飾にすぎない。

六 倒反

話し手が口頭で述べている意味と心中の意味が全く違うもの、これを倒反と呼ぶ。倒反は二つに分けられる。情感が深すぎて言葉にし難かったり、差し障りがあるが、だからといって皮肉を言ったり諷刺の意味などを含んでいるわけではない、これが第一類で、これを倒辞と呼ぶことにしよう。例えば

（一）客殿・僧坊の片隅でよし、もしもわたしに貸しあたえ、憎い人のお住まいと たがいに門が向き合いさえばよい。（『西廂記』借廂。「憎い」は極めて愛しいことの倒辞である。）

（二）「ほくも横になりますよ」と宝玉は言った。「では横におなりなさい」と黛玉はいう。宝玉はいう、「枕がないから、一つ枕で休みましょうよ」……黛玉はそれを聞くと、ぱちりと目を開けて起き上がり、笑っていった、「まったくあなたは、私の運命にまといつく妖魔星、そんなら、どうぞこの枕を」そう言って、自分のあてていた枕を宝玉の方におしやり、立ち上がって自分のをまた、一つ取ってきた。（『紅樓夢』第十九回。この「妖魔星」が宝玉を指す。）

（三）話しおえた倪継祖は黙りこくって、ただ頭を

垂れて泣いている。李氏は心中やるせなく、すぐさま一計を思いつき、かくかくすれば、この憎いやつは戻って行くだろうと考えた。考えが決まるといった。「息子よ、もう泣きなさんな。私に三つの案がある。これに従うなら、万事うまくいくだろうさ。母さんもきっとお前と一緒に行くよ。どうだい。」倪継祖はすぐさまいった。「三つの案だって？母さん教えてくれよ」（この「憎いやつ」が息子を指す）（『三俠五義』第七十二回）

第二類は言葉の意味が全く逆ばかりではなく、皮肉や諷刺の意味を含むもの、これを反語とよぶ。例えば、

（四）人々の血潮が中国の土壤に注ぎ込まれて 風になびかぬ強靱な草のような烈士を育て、酷寒の冷気が大地を凍結させて 春の花のような新しい世代を開花させる。英雄たちの身边には何かとごたごたが多く、謀略を好む人々は病気がちである。悲しみのあまり涙で高い陵墓をぬらすとき、暮れなずむ空に鴉どもが鳴きさわぐ。（魯迅『無題』詩。「英雄」が反語で、国民党の反動分子を諷刺する。）^{*35}

（五）やがて人々がやってきた。探春はことさらに、「どうしたのです」と聞いた。熙鳳が笑って、「失せ物がありまして、このところ連日捜しているのですが、犯人があがりません。ひょっとほかの者がこちらの女の子たちに罪をなすりつけるような事があったら困ります。それでいっそ皆で取調べて、嫌疑をなくしてやったほうが、女の子たちの潔白を証してやる一番いい方法だろうということになったわけなんですの」というと、探春は冷笑していった。「あたしの処の女中はむろんみな泥棒でございます。第一あたしが泥棒の大親分でございます。そういうことでしたら、どうかまずあたしの箱や長櫃から捜して下さい。この子たちが盗んできたものは、全部あたしが取り上げて、しまっておりますから。」そういうやいなや、女中たちに命じて箱を一斉に開けさせた。鏡台も、化粧箱も、寝具の包みも、衣類の包みも、大きなもの、小さなもの、一つ残らず中をあけさせて、熙鳳に調べさせた。熙鳳は会釈笑いをしていった。「あたしはただ奥方さまの仰せによって参っただけですよ。探ちゃん、どうかあたしのことを悪くお取りにならないでね。」そういうと女中たちに「早く元通りしまいなさい」と命じた。（『紅樓夢』第七十四回）

（六）孫定は非常な硬骨漢で、……助けてやらねばと……あれこれしらべて、役所に情報をつたえ、

^{*34} 汪中『述学』・積三九：汪中は清代の学者。ここでは、古典に見られる誇張（汪中はこれを形容という）を指摘した部分で、「黄帝・堯・舜の子孫を封じるほどだった」は「黄帝・堯・舜の子孫をすぐさま封じようとするがごとくであった」の意味として解釈しようとするもの。

^{*35} 訳は学習研究社『魯迅全集』9（集外集）による。

「この事件は林沖を陥れるものである事は確かで、彼を助けるべきだ」と申し上げた。役所の長官は、「彼が罪を犯したとして、高太尉からその罪を伝えられている。‘手に鋭い刀を持ち、故意に節堂に入って、本官を殺害しようとした’と判決を下す事になっているのだ。助けられるものか。」孫定は言った、「この開封府の役所は朝廷のものではなく、高太尉の家だとは。」(『水滸伝』第七回)

(七) 楚の莊王のとき、王には愛馬があって、うるわしい刺繍の衣を着せ、立派に住ませ、幕こそなければ寢室を席とし、干し粟を食わせていた。その馬が肥えすぎて死んだので、群臣に服喪させ、棺や槨を大夫の礼遇にして葬ろうとした。左右の近臣がこれを不当として王を諫めると、王は命令を下し、「馬のことでわしを諫めようとする者は死罪にしよう」と言った。優孟がこれを耳にすると、宮殿の門に入り、天を仰いではげしく哭いた。王が驚いてわけを問うと、優孟が言った。「馬はだいじな王の愛馬であります。堂々たる楚国の盛大をもってするなら、どんなことでもできないことはありますまい。大夫の礼をもって葬るなど、あまりに簡略すぎます。どうか人君の礼をもって葬りたいものでございます。」(『史記』滑稽列伝)^{*36}

(八) 莊宗は狩が好きで、中牟で狩りをし、人民の畑を踏み荒らした。中牟の県令は、馬の前に立ちただかり民のために諫めた。莊宗は腹を立て、県令を叱責して連れて行かせ、殺そうとする。伶人(楽人)の敬新磨はこれはまずいと思い、他の伶人を引き連れ県令を追いかけ、王の馬の前で捕まえ、ののしって「お前のような県令ごときでも、我が天子の狩り好きを知っていよう。人民に作物を作らせそれを賦税として取めさせる事などどうでもよいのだ、どうして汝の県民を飢えさせても、この場所を空けておいて、我が天子が狩に駆け回るように準備しておかなかったのか。お前の罪は死罪に当たる」と言い、進み出てさっさと刑を執行するように申し上げると、他の伶人たちがこれに唱和した。莊宗は大いに笑い、県令は許された。(『五代史』伶官伝)

(九) 蕭俛及び段文昌は軍兵を削減する方法を議して、毎年百人のうち、逃亡や死亡では八名までは補充しない、と主張した。笠翁(李漁)が言う。古来兵を減らす方法は、蕭俛及び段文昌の兵を減らす方法より優れたものはない。古人は馬を華山に放ち、牛を桃林に放ち、剣を売って牛を買わせ、刀を売って子牛を買わせた。この方法は確かに好いものだったけれども、結局軍兵を減らすことはできなかつ

た。なぜかといえば、それは馬や牛を放ったり兵器を売ったりする人がいれば、それを捕まえたり買ったりする人がいるわけで、何か事が起こると、すぐに集められるからだ。つまり、軍兵を削減すると言ってはいるがそれを実際に削減するのではなかった。蕭俛及び段文昌の打ち出した方法の逃亡及び死亡による補充に限界を設けるといふもののほうがこれよりも勝れる。逃亡すればどこかへ行って帰らないし、死ねばそれで終わりで生き返ることはない。これは自軍の釜を壊し舟を焼いてその退路を断ち懸命に戦わせようという計略を逆に用いたものである。このように兵を削ってこそ、始めて根本を解決する法だと言える。しかし、さらに二項目の法をつくってこれを補助しなければならない。一つは、兵士が病気になっても薬を飲ませてはならない。二つめは盗賊を警戒しても撃滅してはならない。こうであれば、兵は逃げ場所ができて逃亡する者が多くなるし、病気になっても救われることなく死者も増える。さもないと、寿命には運命があるのだから、必ず死ぬ者の数を限ることはできないし、逃げ場所がなければ、どうして逃げ出すことに責任をもてようか。(李漁「論唐之再失河朔不能復取」)

反語は倒反辞の根幹であって、文章や話の中でかなり多く用いられるばかりでなく、また味のある用い方も容易にできる。

反語では成語を逆に用いることもある。例えば宋の袁褱『楓窓小牘』(巻上)に載せる「宣和年間に次のような反語があった：寇萊公－知人則哲(人を見抜いてこそ哲人)、王子明－将順其美(順序に従い物事を完成する)、包孝肅－飲人以和(何も言わずに人を満足させる)、王介甫－不言所利(自分の利益を口にしない)」、これがその例である^{*37}。

七 婉曲

話をするとき、直接本題を述べるのではなく、婉曲に意を含ませて述べるにとどめてその示唆を際立たせようとするもの、これを婉曲という。この表現法を構成するには、たいだい二種の主要な方法がある。第一は、本題を述べずに、他のことを使って本題を浮き上がらせようとするもの。例えば、

(一) 最近瘦せました、酒の飲み過ぎでもなく、秋の寂しさ故でもありません。(李清照「鳳凰台上憶吹簫」詞)

ここで伝えたいのは恋い慕う辛さであることは明かなの

^{*36} 訳は筑摩書房世界文学大系『史記』列伝篇による。以下同じ。

^{*37} 『楓窓小牘』ではこの文の後に「皆賢者之過」(これらは皆賢人の欠点だ)と続きこの語が否定的な表現であることがわかる。

だが、直接には述べていない。また、

（二）朱雀橋の近くは雑草が賑やかに花を咲かせ、
烏衣巷の入り口に夕陽があたる。昔は名門の王や謝
家の邸宅に巢を作っていた燕も、今では庶民の家に
出入りするばかり。（劉禹錫「烏衣巷」詩）

伝えたいのは世事の変遷の急激な変化であることは明白だが、はっきりとは述べていない。また、

（三）川べりの荒れ果てた楚の城に猿の声が寂しく
響く、川の向こうがわに屈原を祭る廟が見える。も
う一千五百年も前のことだ。おそらく当時もこの瀬
の音が響いていたことであろう。（陸游「楚城」詩）

ここで述べたいのは昔の様子と違ってしまった風景であることは明かだが、やはりはっきりとは述べていない。これらの例は意は言外にありという婉曲の適例である。宋の司馬光の『迂叟詩話』に言う、「古人が詩を作るとき、尊ぶのは、その本意を言外に置き、考えさせて感得させることだった。近世の詩人では、杜甫が最も詩人の体を得ている。例えば「春望」では「都はめちゃくちゃになってしまったが、山や河はむかしのままであり、長安には春が訪れて草や木が深々と生い茂っている。世の中のありさまに心を動かされてはおもしろかるべき花を見ても涙をはらはらとこぼし、家族との別れを恨んでは楽しかるべき鳥の声を聞いても心を傷ませている^{*38}」という。「山は河は昔のままであり」で、そこに他のものが残っていないことが明らかであり、「草や木が深々と生い茂っている」で、そこに人が居ないことが明かである。花鳥は、通常は楽しみに足るものだが、これを見て涙を流し、その声を聞いて心を傷ませる、これによりその時代の險悪さを知ることができる。他もみなこの類いであり、全て挙げることはできない。」彼の言葉はこの種類の婉曲を論じたものなのである。

第二類は本題を述べようとするとき、ぼんやり示唆する言葉で意図を示すもの。例えば、

（四）三月、宋の華督が来て盟を交わした。……わが公が宴に招こうとされると辞退した。彼は断てこういった。「我が曾祖父の督は、宋の殤公に罪を得まして、その悪名は諸公の記録に載せられておりますのに、私はこれを祖先として祭る身の上でございます。ご宴に列しましては、君の御名にも拘わります。何とぞ並の大夫の格でお扱い下さいませ。」魯鈍な人は、孫華を身の程をしるものと感心した。（『左伝』文公十五年）^{*39}

宋の華督が殤公を殺害したのは、『左伝』桓公二年だが、ここでは「罪を得て」というばかりである。また華

耦の「理由もなくその先祖の罪を表にする」ことは、聡明とはいえない、しかし文中では「魯鈍の人はこれを聡明だといった」と述べている。共にぼんやり示唆する言葉を使い本意を述べる婉曲表現である。また、

（五）……さらに、江亢虎博士は、昔、社会主義を語ることで名声を得た有名人であるが、彼の社会主義は結局どうなっているのか、私は知らない。（魯迅「名人と名言」）^{*40}

これもまた示唆する語を使い、江亢虎という人物が決して社会主義者ではない事を示したのである。また、

（六）絳侯勃は自ら誅殺されるのではないかとおそれ、いつも甲をつけ、家人には武器を持たせて面接した。その後、上訴して勃が謀反しようとしていると告るものがあつた。帝は書類を廷尉に下し、廷尉は事件を長安にくだし、勃を逮捕して審理したところ、勃は恐れて答弁することもできず、獄吏からは甚だひどい目にあわされた。勃が千金を獄吏にあたえると、獄吏は木札の背中に、「公主を証人とせよ」と書いてみせた。……絳侯は獄を出ると、「わしはかつて百方の軍に将だったが、しかし獄吏がこんなに権威があると知らなんだ。」と言つた。（『史記』「絳侯周勃世家」）

これもまたぼんやりとした言葉で獄吏の勝手気ままさを明らかにするのである。汪中の『述学』「釈三九」の中篇では「『春秋伝』（閔公二年）に「衛の懿公は鶴が大好きで、鶴には車に乗るものがあつた」と言っている。鶴は車に乗るのを欲はずはないし、鶴を好む者は鶴が遠くに行くことを求めもしない。ここでは卿の官位を与えて可愛がり、卿の俸禄を与えて養つた事を言うのである。したがって「鶴は実際に禄位があつた」ということなのだ。とはいえ、卿と見なされたと言わずに、車に乗るといったのは、表現を婉曲にしたのである。……周の人は文を尊んだ、君子の言葉使いは直接には言わずとも届くようにするものだ、従つて婉曲になるのである。」これこそこの婉曲の用法なのである。

このほかにもう一類、用語を変え、その言葉遣いで意図を示す方法もある。例えば「悪いもの」と言いたい場合でも、「あまり良いものではない」としか言わず、「行かねばならぬ」と言いたいときに、「行くのが最善だろう」としか言わない等の類もこの分類にはいる表現法である。

八 避諱

発話において禁忌の物事に思いがけず話が及び、その

*38 訳は岩波文庫『杜甫詩選』による。

*39 訳は中国古典文学全集『春秋左氏伝』による。ただし、引用の文は「魯人」の解釈は陳望道の解釈により魯鈍の人と変えている（この解釈は疏に基づく）。

*40 訳は学習研究社『魯迅全集』8（且介亭雜文二集）による。

事象や事物を直接言うわけにはいかず、それに関係する話題で回避して覆い隠すか或いは飾り立てて美化するもの、これを避諱表現という。

避諱表現には公に用いる公用とその場限りの独用がある。明の陸容『菽園雜記』(卷一)に言う、「民間の俗諺は、至る所にあるが、呉地域が最も多い。例えば舟に乗れば、「住(進まない)」「翻(ひっくり返る)」等を忌み嫌い、箸は快児といい、幡布は抹布という。離散を避諱し、梨を圓果と呼び、傘を豎笠という。狼藉を避諱し、榔槌を興哥と呼ぶ。悩躁を避諱して、謝灶(竈君の祭り：蘇州)を謝歡喜と呼ぶ。^{*41}昔の避諱の中には、しばしば迷信の色合いを持つものもあった。俗諺とは、公用の避諱表現だ。公に用いる避諱表現とはいえ時代や場所によって違いがある。例えば、清の俞樾『茶香室統鈔』(卷七)に、「快児・抹布などの言い方は、今でもつかっているが、その他のものは聞いたことがない^{*47}」と述べる、これが時代によって異なる例である。北京の人は鶏卵を避諱して、鶏卵を松華、流黄などの各種違った名前に変えて呼ぶが、福建の人は茄子を避諱しており、茄子を紫菜と呼び変えている、これなどは場所によって異なる例である。

独用の避諱は、概ね決まったものはなく、その場の状況により替わってくる。例えば『晋書』王衍伝に：

(衍は) これまで銭と言ったことが無かった。(衍の妻は) 試してみようと、召使いに銭をベッドの回りに撒かせ歩けないようにした。王衍は朝目が覚めると、銭が見える。召使いに、「阿堵物をかたづけよ」と告げた。

「阿堵」とは「これ」と言う意味で、ここではその言葉を避諱語としたのだ。これは主義を貫くための避諱である。『戦国策』趙策四の場合は、

趙太后が新たに政権を握るや、秦がすぐさま攻め込んだので、趙氏は齊に助けを求めた。齊は、「長安君を人質に出すなら、軍を出す」という。大臣たちは強くそれを勧めた。太后は左右の部下に向かって宣言した、「再度長安君を人質にせよというものがあれば、私はその顔につばを吐きかけるであろう。」左師の触讐が太后が面会を求めた。太后はこわばった顔つきでこれを出迎えた。入るや小走りで進み、面前に到るとお詫びをし……、太后の顔も少し緩む。左師公は以下のように述べた。「老いぼれの愚息舒祺は、末っ子で、できが悪うございます

が、私めも衰え、かわいくてなりません。どうか近衛兵の一員として王宮の警備役に加えていただけないでしょうか。死ぬ覚悟でお願いに参りました。」太后は応える、「宜しい。歳は幾つかな。」応えて言う「十五才になりました。まだ若いのですが、私が谷を埋める前にどうかお願いいたします。」太后は言う、「大丈夫でもその年少の子供が心配でならないものか。」応えて言う、「婦人よりも更に。」太后は笑って言う、「婦人とどこが違うのか」。応えて言う「思いますに、あなた様の燕后を愛されること長安君よりも勝ると同じではありませんまいか。」太后は言う、「それは間違いだ、長安君ほどではない。」左師公は言う、「父母は子供を愛するが故に、深慮遠謀を巡らします。あなた様の燕后への送別は、後に付き従い、涙をながして、その嫁ぎ先の遠さを悲しまれました。お別れになっても、忘れることはありません。祭祀の時には必ず神に祈らせ、その語は「帰させられませぬように」というもの。これは末永く子孫が王位を継承するようにと願ってのことでありますまいか。」太后は言う、「その通りだ。」左師公は言う、「今から三代前、趙が趙となったとき、趙の主人の子孫で侯となり、後を継いでいる者は今でもいるのでしょうか。」「いない。」「趙以外に、諸侯ではいかがでしょうか。」「私はそんな話を聞いていない。」「それは近ければ禍がその身に及び、遠ければ子孫に及ぶからです。主人の子孫が必ずしもできが悪かったわけではありません。高い位にありながら功績もなく、俸禄は厚いのに仕事をしない、その上国の宝をたくさん持ってしまったからです。今、あなた様は長安君の身分を尊重し、肥えた土地に封じられ、国の宝をたくさんお与えです。しかし、今まで国のための仕事をさせたことはありません。もし山陵が崩れるような事態が起りましたら、長安君はどうやって趙にとどまれるでしょう。老いぼれが考えますに、ここがあなた様の長安君へのご配慮の足りないところです。従ってその愛は燕后に及ばないと考えました。」「なるほど、あなたのするとおりにしよう。」

同じように死ぬという言葉避けながら、自分の死は「谷を埋める」といい、太后の死を「山陵が崩れる」といっている。これもまた状況に応じ、相手方の情感を考えて避けたのである。これも搾取階級の上下尊卑の観念

^{*41} 以下引用文当該の漢字の発音を現代音で () の中に示す。「住(進まない・zhu)」「翻(ひっくり返る・fan)」等を忌み嫌い、箸(zhu)は快(kuai)といい、幡布(fanbu)は抹布(mobu)という。離散(lisan)を避諱し、梨(li)を圓果(yuanguo)と呼び、傘(san)を豎笠(shuli)という。狼藉(langji)を避諱し、榔槌(langchui)を興哥(xingge)と呼ぶ。悩躁(naozao)を避諱して、謝灶(xiezhao)を謝歡喜(xiehuaxi)と呼ぶ。

^{*42} 俞樾の『茶香室統鈔』七巻の俗諺では本文に引用する明陸容『菽園雜記』の文を引いており、ここで言うその他とは圓果・豎笠・興哥・謝歡喜等の言葉を指す。

を反映したものだ。避諱の作用はほとんどが対話者および関係の及ぶ者の感情に気を配り、極力嫌な話題を避けて、聞き手が不愉快にならないようにするものである。賈誼の「時政を論じる疏」には、「昔は、大臣で汚職で首になった場合、汚職とは言わず、簞簞を飾らずといい、不潔な淫乱を行い、男女関係にけじめがなくクビになる場合は、不潔とは言わず、帳簿を修せずといい、無能で任に堪えずに首になる者は、無能とは呼ばず、下官職せずといいました。したがって、立派な大臣が罪を犯したとき、まだ正しい表現で弾劾する事はしていなかったのです。遷就を尊び表現を避けたからであります。」という。ここにいう遷就（意を曲げて相手に合わせる）とはこの表現法の基本である。

会話での避諱は大半が本来の言葉を曖昧な言葉に代えるもので、先に挙げた「阿堵」の語の用法と似たものだ。今以下に若干の例を挙げる。

（一）熙鳳はややしばらくじっとうなだれていたが、やっといった。「こうなれば、ほんとうにもうほかにしようがありません。お葬式にいるものを一式ととのえておいてあげなければなりませんまいね。そうしてそれを突き破るのもいいと思いますわ。」
「ええ、わたしもじつは内々でその用意をさせていますんです。ただあれにする材のいいのが手にはいないものですから、このところゆっくり構えているんですけれど」と尤氏はいった。（『紅樓夢』第十一回）

ここにいう「あれ」とは棺桶のことだが、棺桶とはっきりと言わないのだ。

（二）王胡子はこっそり鮑廷璽に言う、「あなたの話もそろそろ持ち出す時期ですぜ。私の感情では、あの話はもうなくなる頃合いだ。これ以上誰かがたかりに来たら、あなたの分はなくなっちゃいますからな。今晚は切り出すんですぜ。」（『儒林外史』第三十二回）

ここにいう「あの話」とは金のことだが、金とはっきり言わないのだ。

（三）王仁は笑って、「あなたの兄さんは県知事殿と親しくしている、と日頃よく言っておられたのに、なんでこればかりのことで肝を冷やしてお逃げになったのだろう」嚴致和は言う、「そいつは一口には言えません。とにかく。兄はもう遠くに飛んでいるのですし、役人は私のところへ兄を出せと押しかけてきているんです。私の家のことを放り出して、兄をさがしに行くわけにはいかないし、兄も帰ってこようとはしますまい。」（『儒林外史』第五回）
「遠くに飛んでいる。」とは逃げることに他ならないが、

逃げ出したとはっきり言わない、これらの例はほんやりとした言葉によってその意味を暗示したのである。

付記一

避諱を「曲語」と呼ぶ人もいる。章士釗訳の師辟伯「感情による言語変化原論」^{*43}のなかに曲語を論じた一段があり、頗る参考になる。今以下に抄録する。「曲語とは、ある事を表現するときに、明快には述べないのだが、聞けば分かってしまうもので、二人の間では共に喩えとされるものである。例えば妊娠は、性欲と関係するので、はっきりとはいえない。しかし、国中で子供を産む話をしないこと、それはまず難しいことだ。そこで遠回しに述べて、あの事とか、働かせられなくなったとか言うのである。婉曲な言い方は直接的な言い方に比べて、つまるところいくらかは勝っていること、これは疑えない。人の表現で嫌がられるのは、言葉ではなく、言葉のもつ意味だからだ。いま、働かせられなくなった、といえば、表現は異なっても、その指し示す事態は同じ事で、それを聞いたからと言って歓ぶわけではないのは、直接妊娠したということと変わらないからだ。しかしながら、人は詰まるところ暗示する語を使い明言を避けるものだ。……ある人が妊娠と聞いて怒り出すのは、不純な関係を考えるからだ、あのことだと聞いて歓ぶのは、関係の親しさを考えるからだ。その心境を考えれば、人と顔を合わせて語る際に、或る事柄を直接は示しづらいときには、婉曲に遠回しに表現してしまうものである。思うままに話したのでは、うまくは行かないからだ。それとともに、語り手は自然にそれが理解されるように、その表現がその事を指しているように言うのだが、とっさの時でもあり、大概はやむ得ないもので、唐突な感じも、避けられない。……であれば、曲語を使うのは、互いにきわどいところをすり抜けようとするためなのだ。人が話すのを聞いていると、語りづらい場面にでくわした場合、言葉がつかえたり、声が小さくなって、曖昧に過ぎる場合がある。これもまたその方法で表現するもので、もしちゃんと言ってしまうと、失礼になると分かっていることを示すのだ。その心情は曲語と全く同じである（pp53～5）

九 設問

既に考えは決まっても、話の中で故意に問いかけること、これを設問という。この設問は二類に分かれる。

（一）は下文を導くために問いかけること、これを提問と呼ぼう。この類の設問はその後ろに必ず答えが存在する。（二）は気持ちを前面に出すために問いかけるもの

*43 章士釗（1881～1973）は中華民国から共和国時代を生きた無党派知識人。師辟伯はドイツ人のハンス・スペルバーを指すらしいが書籍未見につき不明。

で、反問（激問）と呼ぼう。この類の設問には必ずその逆の答えが出される。

一 提問

(一) 先ずは尋ねよう、この七名は一体誰と思われ
る。他でもない、まさしく晁蓋、呉用、公孫勝、劉
唐、三阮（阮小二・阮小五・阮小七）の七人だった
のだ。（『水滸伝』第十五回）

(二) 生命の路は進歩の路だ。絶えず無限の精神三
角形の斜面に沿って、上に向かって歩いていく。何
ものもそれを阻止することはできない。

自然が人間たちに与えた不調和は、まだとても多
い。人間自体が萎縮し、墮落し、退歩していく場合
も、まだとても多い。だが生命は、そのために後戻
りすることは決してない。いかなる暗黒が思潮の流
れをさえぎろうとも、いかなる悲慘が社会を襲うと
も、いかなる罪悪が人道を冒瀆しようとも、人類の
完全を渴望する潜在力は、それらの鉄条網を踏んで
前進せずにはいない。生命は死を恐れない。その面
前で笑いながら、踊りながら滅亡した人間たちを踏
み越えて前進する。

路とは何か。それはかつて路のなかったところに
踏みつくられたものだ。かつて荆棘しかなかったと
ころに切りひらかれたものだ。（魯迅「生命の路」）^{*44}

(三) 元年とは何のことか。君主となった始まりの
年のことである。春とは何のことか。歳の始まりの
ことだ。王とは誰のことか。文王のことである。な
ぜ最初に王といいその後ろに正月というのか。王の
正月だからである。王の正月とは何を言うのか。天
下の統一をいうのだ。公になぜ即位といわなかった
のか。公の気持ちをくんだのだ。公の気持ちをくむ
とはどういうことか。公は国を平らげようとして桓
の順番を逆にして先に立ったからだ。なぜ桓の順番
を逆にして先に立ったのか。桓はまだ幼かったが高
貴な地位にあり、隠公は年長であったが身分は卑し
かった。その尊卑については目立つことではないの
で、国の人々は知るところではない。隠公は年長で
賢人でもあったので、大夫たちは隠公を押し立て
て位に就けようとした。隠公はここに於いて辞退し
ようとした。桓が位に就くべきだと考えたのだ。しか
し桓が位に就けば、大夫たちは幼い君主を助けられ
はしないだろうと心配したのである。したがって、
隠公の就任は、桓の為の就任なのだ。隠公は年長で
しかも賢人である、どうして位に就けないのか。ふ
さわしい人物を立てるのであれば、年長者を先にし
て賢人であるかどうかではない、跡取りを決めると
きは、尊貴を基準にして歳の上下ではないからだ。

桓はなぜ貴いのか。母親が貴いのだ。母親が貴けれ
ば子供はなぜ貴いのか。子供が母親によって貴で
あれば、母親も子供によって貴となるからだ。（『春
秋』隠公元年春王正月『公羊伝』）

(四) 危いときはどんなときか。怒りのときであ
る。道を失うのはどんなときか。欲望にかられたと
きである。友人を忘却するのはどんなときか。富貴
になったときである。（「杖銘」、『大戴礼』卷六武王
踐阼篇）

(五) 天地は果たしてその初めの状態があったのか
無かったのか、私にはそれは分からない。人には初
めの状態というものがあったのかどうか。私にはそ
れが分からない。しかしながら、無いか有るかどち
らか正しい方に近いかと問われれば、初めの状態は
あった、と考える方が近いだろう。どうしてそれが
分かるのか。封建の制度からそれが分かるのだ。封
建制というものは、古の聖王堯・舜・禹・湯・文・
武と交代しても、誰も棄てることはできなかった。
棄てようとしなかったわけではなくて、社会情勢と
してそれができなかったのだ。この社会情勢ができ
あがったのは、人が生まれた初期段階ではあるまい
か。このような初期段階があつてこそ、封建制がう
まれるのだ。封建制とは、聖人の意図ではないのだ。
（柳宗元「封建論」）

(六) 太陽が東の方から昇る、地底より出てきたか
のごとくだ。空を巡ってまた西海に入れば、牽いて
いた六龍はどこに宿るのだろうか。そもそもその初め
と終わりはむかしから常に起り続けてきた。人間
は元氣を持たねばこれと共に行動をすることはでき
ないのではないか。草は春風に成長のお礼を言うこ
ともなく、木は秋風に落葉の怨みを告げるものでも
ない。一体だれか鞭を持って四時のめぐりを追い立
てる者がいるのか。万物の興廢は全て自ずからそう
なのである。（李白「日出入行」詩）

(七) 客が遠くからやってきて、私に二匹の鯉をく
れた。子供を呼んで鯉を調理すると、その中に布の
手紙が入っていた。膝をついて手紙を読んだ、手紙
には一体何が書いてあったのか。まず初めに、しっ
かり食べよとあり、最後には、ずっと思っているよ
とあった。（古楽府「飲馬長城窟行」）

(八) 齊の城門をでて、蕩陰の里を遙かに眺める。
里には三つの墓があり、同じように並んでいる。一
体どなたの家の墓かと尋ねると、田開疆と古冶子ら
だという。その力は南山を動かし、その文は人々を
驚かすほどだった。あるとき讒言にあい、二箇の桃
で三人を殺してしまうことになったのだ。誰がその
企みを行ったのか。国の宰相齊の晏子である。（諸

*44 訳は学習研究社『魯迅全集』1（熱風）による。

葛亮「梁甫吟」

二 反問

(九) 闘争そのものは、わたしは正しいと考えます。抑圧されれば、戦って当然ではないでしょうか。(魯迅「文芸と革命」)^{*45}

(十) いま、君ら理想家は、また女子の断髪とか騒いでいるがね。苦勞するだけで何のいいこともない人間をまた作り出そうっていうのかね。

いまだって髪を切ったために、学校にも入れなかつたり、退学になつたりしている女が出てるじゃないか。(魯迅「髪の話」)^{*46}

(十一) 全て荒唐無稽の話、あふれる辛い泪、皆が馬鹿な作者だというのが、その中の真の味わいを誰が知ろうか。(『紅樓夢』第一回)^{*47}

(十二) もしよく分からないという問いがあれば、孔子を責めても、何の悪いことがあろうか。もし伝えられている他の聖人の智恵があり、それで孔子の説を攻めても、どうして道理に背くことがあろうか。(王充『論衡』問孔)

(十三) 川は皆東に流れて海にいたる、いったい何時西へと戻るといふのか、若い頃に励まずにいれば、歳を取ってから哀しいばかりだ。(古楽府「長歌行」)

(十四) 誰が心にわき上がる思いを歌わないことがありますでしょうか、誰がお腹をすかせたら食べないことがありますでしょうか。日が暮れて戸口によりかかって待っていても、失望の思いを抱かないでしょうか。(「子夜歌」四十二首の二十三)

修辭学では通常は第二類の反問のみを正式な設問と認める。この類の設問は、否定の形式で肯定の意味を表示し、肯定の形式で否定の意味を示すのが常だ。辞格の中でも特殊な表現法で、切羽詰まった心情の時以外は、余り用いないものである。

十 感嘆

深い思索や猛烈な感情、これと呼びかけあるいは呼びかけに類似した言葉で表出したもの、それが感嘆表現である。感嘆表現には約3種の形式がある。(一)「呵」「呀」「嗚呼」「噫嘻」「哉」「夫」等の感嘆詞を陳述文の前後につけるもの、(二)感嘆の意味を寓した設問の文型を用いるもの。(三)感嘆の意味を寓した倒置の文型を使

うもの。(二)と(三)の二種は、それぞれその中に設問と倒置などの辞格関係があつて、最も純粹なのは(一)しかない。従つて(一)に入るものが感嘆表現辞の中で最も主要な形式であると言えよう。

(一) ああ、なんと危うく高いことか。蜀の道の険しさよ、空に昇るよりも厳しい。(李白「蜀道難」)

(二) 北茫山に登れば、ああなんと。

帝都を振り返り見れば、ああなんと。

宮殿は高くそびえ、ああなんと。

民草の勞苦は、ああなんと。

終わることなく長々と続く、ああなんと。

(梁鴻「五噫歌」)

(三) 刀折れ矢尽きました。勇士は斃れました。王様は討ち死にでございます。敵軍が群がり寄つて、王様の御死骸を奪おうとしております。我が軍は死を決して戦い、うむ、ああ……危のうございます、危のうございます。(魯迅「スパルタ魂」)^{*48}

以上は第一類の例である。

(四) 一夜の春雨に

どれだけの田畑が緑になったことか

一夜の秋霜に

どれだけの山谷が紅葉したことか

なんと不思議なことよ!

絵描きたちを恥ずかしくさせるものではないか!(劉大白『旧夢』旧夢・七十六)

(五) もし秦の始皇帝を長生きさせ、代替わりの後には、扶蘇がこれを嗣げば、四とか三とか言う皇や、六とか五とか言う古代の聖王といえど、決してその隆盛には及ぶものではあるまい。後世の飾り立てた儀礼ばかりの政治がどうして起こつたであろうか。(章炳麟「秦政記」)

(六) 子嬰はこのとき、なんとも孤立して立場も弱かつたので、腐った鼠を排除するごとく張高を刺殺してしまった。なんとという見識、なんとという才能、なんとという大胆さだろうか。(李贄『史綱評要』卷四)

以上が第二の例である。

(七) ほうい ほうい

これこそが 我らの宝

方歳たれ、貧乏人の精神よ!(『上海民歌選』

貧乏人精神讚)

(八) 鄭の成公が病気になった。子駟は、(楚を離れ)晋に頼つて肩を休めましょう、と願つたが、公は、「楚の君は鄭のために戦い、みずから矢傷

^{*45} 訳は学習研究社『魯迅全集』5(三閑集)による。

^{*46} 訳は学習研究社『魯迅全集』2(呐喊)による。

^{*47} 訳文は訳者による。

^{*48} 訳文は学習研究社『魯迅全集』9(集外集)による。尚引用文(一)では「噫吁戲」(ああ)「哉」(~か)、(二)では「噫」(ああなんと)、(三)では「哉」が使われているが、訳文では上手に表現しきれない所がある。

を目に負われた。(鄭は疲れたとは言え) 何も他人のために片棒かついだのではない。自分のためだ。もし楚に背いたなら、今までの骨折りも約束もあだとなってしまう。それでは誰も鄭を寄せ付けないだろう。私を恩知らずにするもしないもお前たちの心しだいだ。』(『左伝』襄公二年)^{*49}
(九) 粹をきかせぬ法総め ええいまいまいくそ坊主! (『西廂記』借廂)^{*50}

以上が第三の例である。上に挙げた三類の例を見ると、第一類のものが最も純粹で最も一般的な感嘆の言葉である事が分かるだろう。この感嘆表現は、文学がまだ革命を経る前には^{*51}、文章制作の技術に行き詰まったときの救済方法として用いられ、読むものに無病の呻吟という不快さを与えていた。従って、馬建忠は文法を論じた書籍の中で、ため息混じりの意見を発せざるを得ず、「現在の文章制作者には、まとめたり、新たに始めたり、話が一山越えるときなどで、うまく展開できないときに、感嘆表現を使い、話を別の方向に向けようとする。そのため一篇の中に感嘆表現が何度も出てくるものもある。しかし文書の力はこれによって失われ弱くなってしまう。残念なことだ。」(『馬氏文通』卷九)^{*52}という。宋人の李耆卿がその著『文章精義』の中で、「欧陽永叔『五代史』には、讚の初めに必ず‘嗚呼(ああ!)’の二字がある。もとよりこれは世の中の変化が嘆かわしく、また彼(永叔)がこの常套句に感嘆を寄せるところにその氣力が現れるのだ」と言うのを読んだことがあるだろう。恐らくは馬建忠氏も、なぜ感嘆の言葉を話の展開を導く作用として勝手に利用できるのだろうか、なぜ‘嗚呼’の二字が初めにあると文章に氣力が表れることになるのだろうか、我々同様これに納得しないだろう。

付録:

意境上の辞格研究の発展状況

霍四通 (復旦大学中文系副教授)

一 意境上の辞格^{*53}

《修辞学発凡》第六篇では主に十種の「意境」と呼ばれる辞格について述べられる。十種とは、一、比擬 二、諷諭 三、示現 四、呼告 五、誇張 六、倒反 七、婉転 八、避諱 九、設問 十、感嘆である。

「意境上の辞格」とはどのようなものか。《発凡》250頁の説明によれば、「意境上の辞格」とは、「心境や意境にそって行われる修辞を指す」ものである。客観を重視する第一類の「材料上の辞格」(「事象材料に沿って行われる修辞を指す」と違って、この「意境上」の辞格は主観を重視する事がわかるだろう。確かに、この十種の辞格は主観性のかかなり強い修辞表現なのである。

おもしろいのは、これらの辞格には、現代の修辞学がその研究領域を確定しようとする時に直面してしまう苦境、即ち周囲に迫る文学と語法学との関係のなかで修辞学はどのようにしてその位置を見いだすのかというその苦境がそこにまとめて表れていることだ。なぜなら、諷諭はそこに引用される例証からみればほとんどみな漢語文学における著名な寓話であるから、一種の文学ジャンルとして容易に見なされてしまうし、示現は文学創作において不可欠な「想像」なので、この両者は文学の領域での議論のほうがより自然である。一方呼告や設問及び感嘆は、話者の語気と密接に関係するので、典型的な語法研究の対象であって、しばしば修辞学の研究領域からは除かれてしまうからだ。

従って、ここでは、比擬、誇張、倒反、婉転及び避諱という主観性がかかなり強い五種の意境辞格について主に考えてみたい。その中で、比擬と誇張は主に話者自身の主観性に関わる辞格であり、倒反、婉転及び避諱となると話者が聴者の理解を考えてできあがる辞格として、話者の「自己形象」と聴者の身分認識を共に配慮するもので、交互主観性(intersubjectivity)に基づく辞格だと言えよう。交互主観性とは主観性から導かれるものだからである。

二、主観に基づく意境分類の辞格

比擬研究の主要な難題は、まず比擬と比喩の区分問題

^{*49} 訳は平凡社中国古典文学全集3『春秋左氏伝』による。

^{*50} 訳は平凡社中国古典文学大系52『戯曲集上』による。

^{*51} 文学がまだ革命を経る前:所謂「文学革命」のこと。空虚で陳腐で難解な文語文による旧文学の殻を破って、生き生きとした口語の文学を創造しようとしたもの。1919年の五・四新文化運動の中で起こった。

^{*52} 『馬氏文通』:中国で初めて書かれた中国語文法書として知られる。

^{*53} 辞格とは、修辞法のこと。ここではそのまま訳語に使った。

である。現在欧米の認知言語学もまた「比擬は比喩の基礎である」と主張している。Lakoff & Johnson (1980: 33-35) 第7章では専題で擬人について論じていて、擬人は隠喩だと見なしている。中国の学者でも比擬は本質的には比喩であって、区別は形式上のみあると考えているものが多い。つまり比喩には比喩される本体と比喩となる比喩体と、比喩である事を示す比喩語があり、比喩体が表れていれば即ち比喩となるのであるが、比擬の場合そこにある本体、比擬体および比擬語（比擬に適用される言葉）の中の、本体と比擬語のみが表れたものが比擬なのであって、比喩体が表面に表れているかどうかの違いが、比喩と比擬を区分する基本原則だと考えるのだ^{*54}。以下に例を示す。

- (1)A：春は生まれ落ちたばかりの赤ん坊のようだ、
頭から脚までみな新しく、育ち続けている。
（朱自清『春』）
B：春、頭から脚までみな新しく、育ち続けている。

例(1)Aには比喩体「赤ん坊」、比喩語「～のようだ」が表れているが、Bでは本体の「春」と比擬語の「頭から脚までみな新しく、育ち続けている」のみ表れて比擬体は出ていない。従ってAは比喩でBは比擬となる。また「比擬は比喩のさらに先に進んだもので」、例えば「彼は飛ぶように走った」は比喩だが、「彼は飛んで来た」であれば比擬だと、一層明快に言う人もいるくらいだ。

比擬は比喩とは本質的に異なるものである。比擬は主に信仰や、感情の移入、錯覚および身代わりなどの心理および認知作用によって可能世界を作り上げるものだからだ。科学技術がまだ発達していない時代には、人類には一般に「万物には霊性がやどる」という信仰があって、自然界や社会生活における各種の現象には、しばしば霊性や人格性が付与されて「信仰比擬」ができあがっていた。神話や童話文学の創作においては、このような比擬はいっそう普遍的に存在しており、だからこそ現実を踏み越えた神話世界と童話世界ができあがるのだ。『修辞学発凡』では、「擬人は常用の修辞法である。描写や抒情の文章のなかで、ほとんどいつでも見かけるものだが、なかでも童話にはたくさんある」と観察している。擬人が童話のなかで大量に用いられるのは、児童の心理と認知特徴に符合するものだからにほかならない。これと関係するのが、感情の移入によってできあがる比擬である。日常のコミュニケーション会話では、通常特別な感情の状態のなかにあり、話者は自分の情感を対象物の上に投入するので、特定の対象に生命力を与えたり人格

化したりする。例えば「時に感じて花も涙をながし、別れを恨みて鳥も心を驚かす」（杜甫「春望」）がその「感情移入の比擬」の例である。

錯覚によってできあがる比擬もある。錯覚のなかには無生物や静止したものを動き出させるものがあるが、より進んだ比擬のために認知の基礎を作るのである。例えば李白の「山は好い月を銜えて」（「與夏十二登岳陽樓」）は、自然景観を主体とする「錯覚による比擬」である。社会生活のなかで起こる錯覚もある。社会現象のなかにある使役関係への錯覚によって導かれる比擬である。何者がそうさせるのは不明なので、しばしば動作の主体を導入して動作の直接主体として「身代わり」をさせるのだ。従ってこれを「身代わりの比擬」と呼んで良い。例えば

- (2)たとえ人生が君を騙したとしても、悲しんではならないし、憤慨してもならない（プーシキン「たとえ人生が君を騙したとしても」）

比擬は独立した修辞方式である。以上検討した4種類のタイプの比擬は、みな比喩に基づくものではないし、また対応する比喩に転換する事もできないからである。

誇張が意境の辞格の中にも含まれる理由もまた、その強烈な主観性による。例えば『詩経』の中でその川幅にさほどの違いはなくても、その狭さを言うときには、「誰が黄河を広いと言うのか、葦の束ほどもない。誰が黄河を広いと言うのか、小舟の幅ほどもない」（衛風・河廣）と表現し、その広さを言うときは、「漢水の広く、游いで渡れないほど、長江は長く、筏では渡れないほど」（周南・漢廣）と述べて、詩人の主観的感情から大きな影響を受けている。従って、劉勰は「……そそり立つ様をその高きこと天を極めと言ひ、狹隘な様を河の狭さは小舟の幅ほどもないと表現し、その多い様を子孫十億人と述べ、その少ない様をその民は一人も残っていないと記したり、洪水が山陵にまで及び空まであふれた話や、武器を逆にして味方を責め戦場には杵が浮ぶほどの血が流れたとの記述があるが、その表現が度を過ぎていても、その伝えようとする意味に影響はないのだ。ましてやフクロウの聞き苦しい鳴き声が、学舎の林では心地よい声に変わるはずもないし、苦菜の味が周の国では飴のようになるはずもない。これらは賛美の意図が含まれているので、このような誇張になったのである。」（『文心雕龍』誇飾）と述べて、誇張表現は意義内容の伝達を害するものではないことを明示し、また「賛美（当然非難の場合も起こりうる）」に使用する例も挙げている。

ギリシア・ローマの昔から、伝統的な辞格研究は誇張を、過大型と過小型に分けている（Quintilian, VIII, 6,

*54 訳注：この部分些かわかりにくそうなので念のため述べておけば、ここでいう比擬体とは、擬人法に用いられる人間、動物や植物などを指す。以下のBの例の場合は、Aでは比喩体とされる「赤ん坊」というものが比擬体となる。

75)。「過大型」とは対象の形態、性質、作用、程度、速度などの面の数値を意図的に誇張して表現することだ。「過小型」とは、これらの数値を意図的に小さくしてしまうことである。しかしながら、このような区分に意味はないと考える学者もいる。例えば、佐藤信夫はこれに疑問を呈して以下のように述べる。「誇張法をひどくきらっているモリエは『詩学とレトリックの辞典』の過大誇張法の項目のなかで、過大と過小の区別などは無益であるというような意見を吐いているが、その点については私も賛成しておきたい。はやさを強調する表現とおそさを強調する表現をいちいち区別する根拠はまったくない。もしそうするのなら、『烈しい寒気があなたを冷凍し、あなたの内臓まで氷漬けにする……』というは過小誇張であり、それに対して『烈しい暑気があなたを火あぶりにし、内臓まで焼きつくす……』と言えば過大誇張だ、ということになるのだろうか。あるいは、『一日千秋』は過大型で『十年一日』は過小型だ、ということになるのか。無用の区別である。』^{*55}とはいえ、このような疑問は言語心理の中の概念的隠喩 (conceptual metaphor)、標記性の現象 (markedness) 及び缺省値 (default value) の存在を疎かにするものであることは明かだ (Lakoff1987: 61)。我々は通常、多・上・長・高等を「大」の範疇で捉え、少・下・短・低/矮等を「小」の範疇に入れるが、前者の方がより基本的であって、しばしば無標記形式で使われる。通常の人間の世界観では、温度が高ければ大であって、低ければ小、速度が速ければ大で遅ければ小で把握される。過小や過大となると一層一般的である。これらのことは疑う必要もないことだ。

三、交互の主観性の意境に関わる辞格

交互の主観性に基づく辞格としてはまず倒反を挙げねばならない。

倒反は、現在では「反語」(Irony) の呼称でよく知られている。学者の中にはクライスの発話含義理論によって反語の使用を解釈する者もいる。その共有原則の中で質量の原則に背くのが反語で、そこに発話の真の意味が生まれるのだと考えるのである。

(3)彼は私にまったくもって好くしてくれるよ (発話の真の意味は「彼は私にあれこれ厳しくあたる」)

しかし、これでは会話中の話者がなぜ直接表現を放棄して、このような誤解を招きやすい反語で表現したかを説明できない。その後に盛んになった関連論は、反語がうそを言っているわけではないので、真実に背く原則を反語の必要条件とするのは間違いだと主張する。例えば、

(4)ピーター：今日はピクニックに絶好の天気だ

(A: It's a lovely day for a picnic.)

〈彼らはピクニックに出かけるが、雨がふりだしてきた〉

マリー (皮肉っぽく)：今日はピクニックに絶好の天気だわね、本当に。

(B: It's a lovely day for a picnic, indeed) (Sperber & Wilson 1995: 318-319)

例文(4)中のマリーの評価は反語と見なしうる。これは反語が文脈に依存している事を物語る。文脈の中にあっては、反語は実際には他の人の発話へ対応して示された評価だと考えるのである。この主張は反語が使われるのはなぜかある程度は説明するものだ。反語には反応性、つまり他人の発話内容への態度の表明があるからだ。例(4)のように、ピーターが天気予測に失敗し、またそのような天気はピクニックには不向きなことを分かっている文脈がある。大切なところも、マリーはその嘲笑と不満をピーターが理解できると知っているという所にある。したがって、反語はすんなりと理解できるのだ。しかし、時には話者に、聞いている相手の認知能力に対する判断がよくできていない時がある。そんなときに反語表現を使うと、そこで伝えたい本当の意図がちゃんと伝わらなかつたり分かってもらえないことがしばしば起こる。このような反語は発話者の一方的な独り言の反語になってしまう。以下は若者が女性の諷刺を賛辞と理解している例である。

(5) (お見合い相手の若者と大学で古典文学を教えている若い女性とが李清照について話している)「彼女の恋人の辛棄疾もとても有名な作家でした。」
どうやらこの若者は話題を探して私とコミュニケーションをとろうとすることに急ぎすぎ、自分が一体何を言っているのか分かっていないようだ。

「理工系の他に、文学の知識も相当お持ちのようですね」

私は懸命に笑いをこらえていた。さもなければきっとゲラゲラと周囲にお構いなしに笑いだしていただろう。

「どう致しまして、皮相な知識で」若者は謙虚に笑った、「あなたのような専門家にはどうしたってかないません」(路也「誰と添い遂げるか」『山東文学』1997年第1期)

若者が女性からの反語による嘲笑を理解できなかったこと、このことは反語の成立が互に通じ合った主観性に基づくものであることを十分に語っている。

最後に「婉転」と「避諱」について考えてみよう。二つの辞格はコミュニケーションにおける態度と面子の要

*55『レトリック感覚』第5章中の文章。

素と関わりがあるので、これもまた主観性の通じ合いに基づくものだ。ここでは二つをまとめて「婉曲」と呼ぼう。とはいえその中で、婉曲には「緩叙法」として時には単独に扱われる現象がある。例えば明かな愚人であっても、しばしば「頭が良くない」と言ってしまうような婉曲が緩叙なのである。しかし、このような表現は通常は既に語彙の中に入っていて何も新しい感じはしないものだ。類似の現象を縮小誇張と見なしても大したことはない。日常のコミュニケーションでは、努めて人の長所を強調し短所は控える、という原則に従うものである。この他は避諱と一緒にしても問題はない。分けようが分けまいが、その心理的活動は似たようなものだからである。

婉曲用法の主観性と主観性の通じ合いについては、互いに融合していて、分けられるものではない。これは婉曲の発展が二つの法則に従うからである。一つはグレシャム（Gresham's law）の法則で、もう一つは更新の法則（Law of succession）である。

グレシャムの法則では、ある単語に「良い意味」か「中性の意味」があり、また「悪い意味」もあるならば、この「悪い意味」が最終的には「良い意味」を排除してしまうというものだ。もし、ある単語がしばしば婉曲的に用いられると、時を経るうちに、この言葉に意味の「墮落」が起り、そもそも持っていた褒め言葉の意味でしだいに用いられなくなってしまう。例えば、英語の gay はそもそも「喜び・快樂」の意味を指していたが、後に「男性同性愛」の婉曲表現になると、もともとの意味のほうはもう使用されなくなってしまうのだ。日本語の「貴様」の用法も同様の変化を経ている。現在、場所によっては「小姐」がキャバクラ嬢やマッサージ嬢、ダンスクラブやキャバレーのホステス嬢の婉曲な呼称となってしまうので、一般には「小姐」を使って若い女性を呼ぶのを避けるようになった。『光明日報』には「呼称の困惑」の記事が載ったし、新華社は「ホステス嬢のおかげで、小姐の呼称が冷たく扱われるようになった」という報告を發している。

こうやって婉曲の「更新法則」が導かれる。つまり、ある言葉が婉曲表現の言葉として用いられると、意味の「墮落」によって、婉曲の色彩がしばらくして失われるので、その言葉の使用を避け、新たに婉曲語を作り出される、というものだ。一つの典型性の高い例が英語の中の妊娠に関する表現の変遷だ。日本人の学者国広正雄が

「女性が妊娠する」という意味の表現を時代ごとに違った表現で並べている^{*56}。

- (6) a. She has canceled all her social engagements.
(1856, 彼女はすべての社交活動をやめてしまった。)
- b. She is in an interesting condition.
(1880, 彼女は現在楽しみな状態にある。)
- c. She is in a delicate condition.
(1895, 彼女は今微妙な状態にある。)
- d. She is knitting little booties.
(1910, 彼女は子供用の鞋を編んでいる。)
- e. She is expecting. (1935, 彼女は待っている。)
- f. She is pregnant. (1956, 彼女は妊娠した。)

これに加えて、中国語の「大便」「小便」^{*57}も本来は「糞をする」「尿をする」の婉曲表現であったが、いまや誰も婉曲表現だとは思えなくなり、「方便」「一号に行く」「手を洗う」などの類いの婉曲表現を作り出した。たぶん、これらの言葉も何年か経つと新しい婉曲語に変わってしまうことだろう^{*58}。

参考文献：

- Lakoff & Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. The University of Chicago Press.
- Quintilian (1856) *Quintilian's Institutes of Oratory, or, Education of an Orator: in twelve books*, literally translated with notes by John Selby Watson, 2 vols. London: Henry G. Bohn.
- Sperber & Wilson (1995) *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.
- 国広正雄 (1974) 『アメリカ英語の婉曲話法』, ELEC 出版社。
- 佐藤信夫 (1978) 『レトリック感覚』, 講談社。

^{*56} この部分、国広氏の意図は、性に関する表現に制約が大きかった時代、時代に応じて婉曲表現が変わったことを示しながら、その制約が減少したときに直接表現が可能になった事を示すもの。霍先生は、それぞれの表現が陳腐になって新しい表現が作られる例の部分に注目して引用している。先掲の佐藤信夫の引用と同様、日本人読者への配慮であろう。この英文は国広氏がアメリカの作家ハーディーの「アメリカの小説の歴史」から著書『アメリカ英語の婉曲話法』(上)に引用したもの。

^{*57} 訳注：「大便」「小便」：『説文解字』では便に「安」の訓をつける。本来は便利・簡便などの言葉に用いられるように「都合が良い」「快適」など意味で、そこから排泄の行動に代用されることになる。

^{*58} 原注：この研究は復旦大学人文社会学2015年青年創新団体發展計画「漢語心理空間整合的共時與歷時」項目の援助を受けたものである。